

PRESS INFORMATION
2005. 4.7

AIRWAVE

HONDA
The Power of Dreams

本田技研工業株式会社 広報部
〒107-8556 東京都港区南青山2-1-1

企業広報 TEL(03)5412-1512/FAX(03)5412-1545

商品広報 TEL(03)5412-1514/FAX(03)5412-1515

URL <http://www.honda.co.jp/>



Contents

P 2	開発にあたって
P 3	コンセプト
P 5	テクノロジー・ダイジェスト
P 7	Stylish (スタイリング)
P 9	Airy (居住性/快適性)
P 11	Airy (パッケージング)
P 13	Flexible (ラゲッジスペース)
P 15	Flexible (ユーティリティ)
P 17	Sporty (走行性能)
P 19	安全/環境性能
P 21	装備/諸元

開発にあたって

今、世の中にはあらゆる分野で、さまざまなスタイルのモノがあふれています。このような中で、自分のセンスや感性を大切にモノやコトをセレクトし、自分らしいライフスタイルを創り出す若い人たちがふえているのではないのでしょうか。

時代の空気を敏感に感じとりながら、しなやかな感性で多彩なスタイルを自由にとりいれ、自分のものにしていくことがカッコいい。

そんな若い人たちの生活を、「もっとスタイリッシュに、もっと楽しくするようなクルマをつくりたい」という思いから開発をスタート。その中で、スタイルとユーティリティを備えた高い汎用性のみならず、軽快なフットワークが、若い人たちのライフスタイルにふさわしいと考え、ワゴンというカタチでそれを実現しようと思いました。

開発にあたっては、街中でも取り回しのよいボディサイズを前提とし、効率的なパッケージを可能にするHonda独創のセンタータンクレイアウトを採用。コンパクトボディにゆとりの居住空間と、広くて低い、使い勝手にすぐれた荷室空間を両立させました。

さらにデザインや軽快なパフォーマンスなど、見て、乗って、走らせて感じる事ができる、開放感や爽快感、そして楽しさなどのソフト価値を徹底追求。乗る人の感性やセンスに響く、新しいプライベート移動空間、エアウェイブを完成させました。

このクルマが、コンパクトカーのニューウェイブとして、若い人たちの生活をスタイリッシュに彩り、新しい波を起こすことができれば、開発者としてこれ以上の喜びはありません。

開発責任者 川勝 幹人



川勝 幹人 (かわかつ みきひと)
(株) 本田技術研究所 主任研究員

1983年、本田技研工業(株) 入社
3代目インテグラ、6代目USアコードの内装・電装のPLを経て、フィットの設計LPL代行、フィットアリアのLPLを担当。
今回エアウェイブのLPLを務める。

軽やかに、スタイリッシュに毎日を楽しむ、
若い人たちの感性を刺激する
Hondaの新しいワゴン、エアウェイブ。

何よりも、自分のセンスや感性を大切にする。
ひとつのスタイルにこだわらない。
しなやかな感性で、新しいものを取り入れていく。

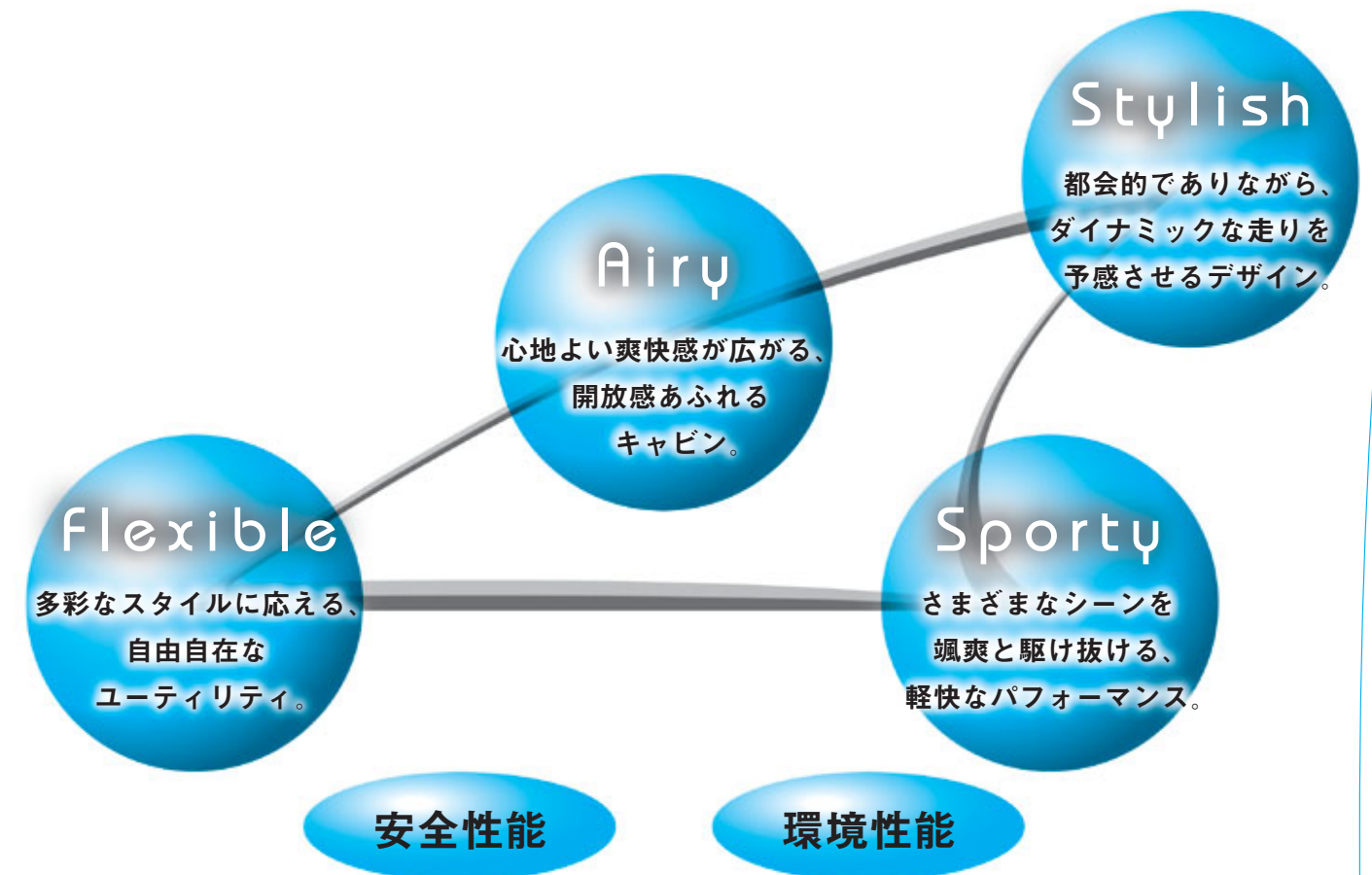
そんな若い人たちの価値観に応え、毎日の生活をよりスタイリッシュに
よりいきいきと楽しむことができるワゴンづくりをめざして
開発をスタートしました。

具体的に取り組んだテーマは、

- **Stylish** = 都会的でありながら、ダイナミックな走りを予感させるデザイン。
 - **Airy** = 心地よい爽快感が広がる、開放感あふれるキャビン。
 - **Flexible** = 多彩なスタイルに応える、自由自在なユーティリティ。
 - **Sporty** = さまざまなシーンを颯爽と駆け抜ける、軽快なパフォーマンス。
- Hondaならではの高い安全性能、環境性能

これらのテーマを、Hondaの先進技術と創意工夫により具現化。
オンタイムでも、オフタイムでも、軽快にスタイリッシュに使いこなせる
ニューウェイブコンパクト、エアウェイブを完成させました。

伸びやかに、軽やかに自分らしい生活を楽しむ若い人たちの毎日に、
エアウェイブがいま、新しい波を起こします。



New Wave Compact



AIRWAVE 誕生

ネーミングの由来：空気の流れ(風)が感じられる、洗練されたスタイルで、明るく、広く、開放感あふれる室内空間を持ち、自然との一体感を創造する爽快感あふれるクルマ、という意味を込めたネーミングです。

Honda独創の技術と工夫を結集し、
スタイリッシュな
ライフスタイルに応える、
新しいワゴンスタイルを創造。

高効率パッケージを実現する
センタータンクレイアウトを採用し、
ワゴンのメリットを最大限活かしきり、
Hondaの先進技術と発想を全身に込めました。

Flexible

多彩なスタイルに応える、
自由自在なユーティリティ。

■荷室には荷室の世界を。
「カジュアルトランク」という考え方。

- 大容量、大開口。しかも荷室長、荷室高も誇れるラゲッジスペース。
- センタータンクレイアウトだからできた、ここまでの低床フラットラゲッジスペース。
- 大開口でありながら、高剛性を実現したテールゲート。
- Hondaならではのユーティリティ技術、より使いやすくなったウルトラシート。
- 小物の収納もスタイリッシュに、使い勝手と上質感を両立。

Airy

心地よい爽快感が広がる、開放感あふれるキャビン。

■どこまでも広がる開放感・爽快感。
コンセプトは
「エアリー・キャビン」。

- 圧倒的な開放感と快適性を両立した、
スカイルーフ&電動サンシェード^{※1}。
- 大開口ガラスエアリア^{※1}を支える、
高剛性骨格。
- やわらかさとしっかり感を両立した、
快適シート設計。

■「人」を最優先に考え、
人がゆったり過ごせ、荷物も
たっぷり積める空間を両立。

- 高効率パッケージ実現のために、
グローバル・スモールプラットフォームを
採用。
- 都市でも扱いやすい、
コンパクトなボディサイズ。
- 特にこだわり抜いたのは、リア空間。
- ロングな荷室長。
- キャビンと荷室を分ける、
セパレートコンセプト。

Stylish

都会的でありながら、
ダイナミックな走りを予感させるデザイン。

■「スマート・ダイナミック」コンセプトの、水中動態形フォルム。

- 大きなラウンド感とワイド感を実現した、
強い個性のフロントビュー。
- スポーティで安定感のあるリアビュー。
- 量感豊かな張りりと、勢いのあるサイドビュー。
- スポーティ&タフネスイメージをプラスした、
アクティブパッケージ(メーカーオプション)。

Sporty

さまざまなシーンを颯爽と駆け抜ける、
軽快なパフォーマンス。

- 爽やかな走りと低燃費、環境性能を高次元バランス、1.5ℓ VTECエンジン。
- 人間の感覚にさらにマッチした
ホンダマルチマチックS+7スピードモード^{※2}。
- スポーティなドライビングを楽しむための、自発光式独立5眼メーター^{※2}。
- 快適性と安心感を追求した、新設計サスペンション。
- 静粛性と加速時のリニアな音質を両立する、優れたNV性能。
- 軽量・コンパクトなリアルタイム 4WD。

※1 G スカイルーフ/L スカイルーフ
※2 L/L スカイルーフ

安全性能

大きな視野で
安全性を追求。

- 事故を未然に防ぐためのアクティブセーフティ。
- 万一の際に人を守るためのパッシブセーフティ。
- リアルワールドでの衝突安全性能を追求。
- アーチ型サイドフレームを採用した衝突安全設計ボディ。
- フロント3点式ロードリミッター付プリテンショナー
ELRシートベルト+前席ラッププリテンショナー。
- リア3点式ELR/ALR(チャイルドシート固定機構)
シートベルト&リアヘッドレスト(3席)。
- 頭部や脚部に対する衝撃吸収構造を採用した、歩行者傷害軽減ボディ。



環境性能

高水準のクリーン性能、
低燃費を追求。

- 全タイプ国土交通省「平成17年排出ガス基準75%低減レベル」認定を取得。
- 全タイプ「平成22年度燃費基準+5%」を達成。
- リサイクル可能率90%以上^{*}を達成。 ※Honda独自基準による
- 鉛使用量を大幅に低減。

Stylish

新しいデザインスタイルを提案する
都会的なスマートさと、ダイナミックさが融合したフォルム。

「スマート・ダイナミック」コンセプトの、水中動態形フォルム。

躍動する筋肉をスイムスーツで覆った水泳選手をイメージし、都会の中をスマートに走る伸びやかなフォルムをめざしました。フロントからリアまで大きく流れるようなスムーズなボディの内側に、走りのための筋肉が隠されているようなイメージです。さらに、フロントまわりに強く印象的な造形を取り入れ、全体のスマートさとともにダイナミックな力強さを実現しています。また、Gスカイルーフ/Lスカイルーフは、ガラスエリアがフロントウインドウからつながり、グラッシーな美しいフォルムを創り出しています。



Photo : L



Photo : Lスカイルーフ

量感豊かな張りりと、勢いのあるサイドビュー。

深く刻まれたキャラクターラインが、効果的なウェッジを生み、勢いのある塊感^{かたまり}を表現しています。サイドビューを引き締めるために、B・Cピラーをブラックアウト。またCピラーは独特の造形を採用し、ワゴンとしての荷室の広さを表現するとともに、人と荷物のスペースを明快に分けました。さらに、ホイールアーチに沿ってキャラクターラインを配することで、タイヤまわりに力がたまっているような緊張感を与えています。また、リアガラス上部を大胆に曲げ、水泳選手が飛び込む瞬間の背中から腰にかけてのみなぎる力を表現しています。

大きなラウンド感とワイド感を実現した、強い個性のフロントビュー。

エアウェイブの強い存在感を印象づけているのが、フロントデザインです。そのひとつがバンパーの角をなくし、そのままめらかにサイド面につながるラウンドした流れ。そして、大きく張り出したバンパーが力強さを表現しています。さらに、サイドにまで回り込んだ4灯式のヘッドライト、幅広メッキの大胆なフロントグリルが、ワイド感を演出。コンパクトでありながら、際立つ個性の存在感あるデザインとしています。



Photo : Lスカイルーフ

スポーティ&タフネスイメージをプラスした、アクティブパッケージ。

よりスポーティなスタイリング、よりタフネスな装備を加えた、もうひとつのエアウェイブ。いっそう個性を際立たせたアクティブパッケージをメーカーオプション設定しています。

<アクティブパッケージ装備内容>

- サテン調メッキ・フロントグリルモールディング/リアクォーターピラーガーニッシュ/テールゲートガーニッシュ
- フォグライト
- ダークシルバー・アンダーガーニッシュ(フロント/サイド/リア)
- ダークシルバー・ホイールカラー*
- 撥水表皮(シート<専用タグ付>/ドアライニング/センターコンソールボックススリッド)
- プレイングボード付ラゲージスペース

*フルホイールキャップ装備車は、フルホイールキャップカラーがダークシルバーとなります



Photo : Lスカイルーフ メーカーオプション(アクティブパッケージ)装着車

Airy

どこまでも気持ちよさを求めた、
心まで解き放たれる、爽快空間「エアリー・キャビン」。

どこまでも広がる開放感・爽快感。コンセプトは「エアリー・キャビン」。

まるで空を飛んでいるかのような心地よい空間を

「エアリー・キャビン」と名付け、

インテリアのデザインコンセプトに掲げました。

鳥が翼を広げて飛ぶ姿をモチーフに、2層の翼を重ねたようなイメージの
伸びやかなインストルメントパネルを中心に、サイドに流れるラインで
キャビン全体を包み込み、伸びやかで開放的な空間を創造しました。



圧倒的な開放感と快適性を両立した、スカイルーフ&電動サンシェード[※]。

前後1,110mm×左右770mm(内寸)の大開口ガラスルーフです。

プライバシーガラスと、高熱線吸収UVカットガラスを組み合わせた合わせガラスを採用。

紫外線や暑い日差しにも充分配慮しています。

さらに、スイッチひとつで開閉する電動サンシェード(挟み込み防止機構付)を採用。

サンシェードは3枚で構成され、好みの位置でとめることができます。

またガラスは、外の景色が自然のままに見えるように色味や明るさも考慮しています。

[※]Gスカイルーフ/Lスカイルーフ ガラスは固定式です ■数値はHonda測定値



Photo: Lスカイルーフ

●スカイルーフ 合わせガラス断面説明図

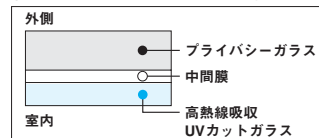


Photo: Lスカイルーフ メーカーオプション装着車 カットボディによる撮影



Photo: Lスカイルーフ メーカーオプション装着車

大開口ガラスエリア^{※1}を支える、高剛性骨格。

ガラスの重量を支えるためには、

より剛性の高いボディ骨格が必要です。

そのために、開口部全周を閉断面とし、強度・剛性を確保。

ガラス後端部を支えるフレームは、Cピラーと連続する位置に設定し、

剛性をアップ。この結果、大開口のガラスエリアを設けながら、

ノーマルルーフと同等^{※2}のボディ剛性を実現しています。

^{※1} Gスカイルーフ/Lスカイルーフ

^{※2} 当社比

●高剛性ボディ構造図



やわらかさとしっかり感を両立した、
快適シート設計。

フロントシートは、腰が自然に奥に引き込まれる形状や

各部の硬さなどを分析し、やわらかく、

かつしっかりしたホールド感のある

ロングドライブにも疲れないシートを追求。

リアシートは、クッション厚やシートバックの

高さにこだわるなど、多彩なシートアレンジが可能な

ウルトラシートの機能を持ちながら

ひときわ高い快適性を実現しました。

また、左右独立のリクライニング機構と

大型アームレストも装備。

スカイルーフ[※]からの風景を見上げる時にも快適です。

[※]Gスカイルーフ/Lスカイルーフ

Airy

人がゆったりくつろげる空間と、
荷物を自在に積める空間を両立したパッケージ。



「人」を最優先に考え、人がゆったり過ごせ、荷物もたっぷり積める空間を両立。

人の空間のゆとりは、そのまま心のゆとり、豊かさにつながります。
ワゴンのような荷物が積めるクルマというと、積載量が大きくクローズアップされがちです。
しかしエアウェイブでは、「人」を最優先に考え、
そのうえで荷室とのバランスやフレキシビリティを追求していくべきだと考えました。
その結果、快適な居住空間と大容量473ℓ^{*}のラゲッジスペースを両立しました。

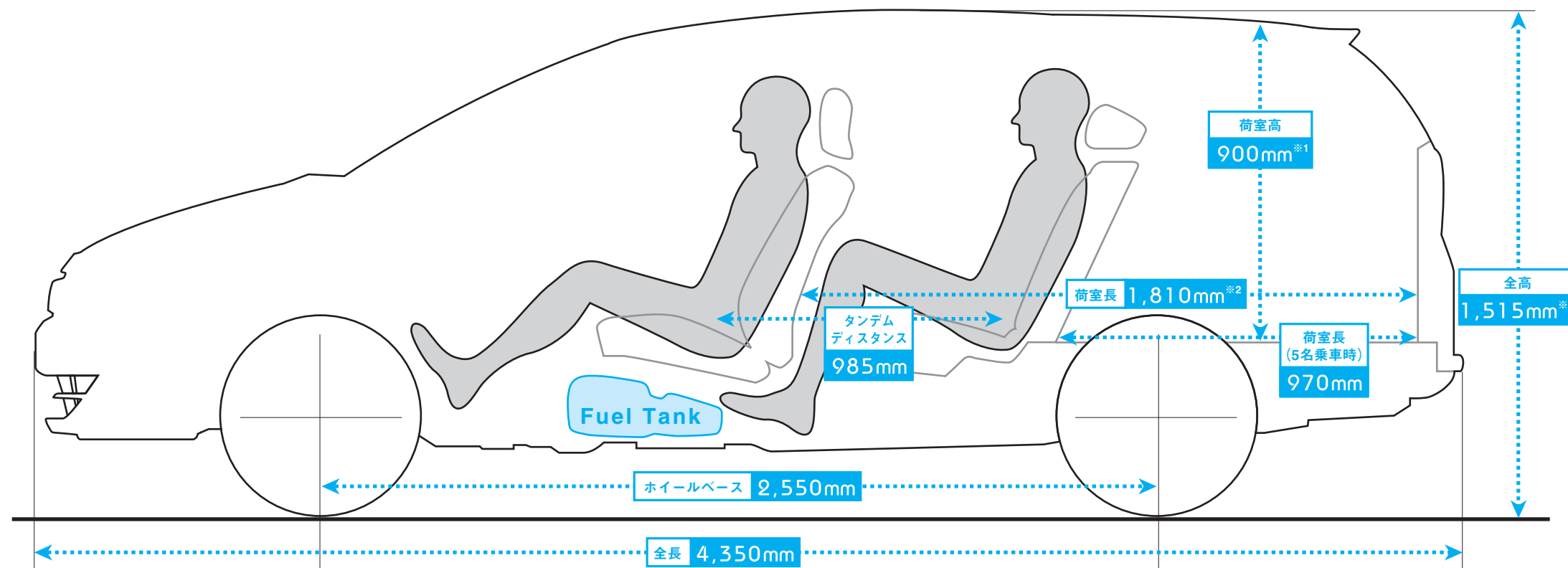
※5名乗車時、VDA方式によるHonda測定値

キャビンと荷室を分ける、セパレートコンセプト。

人の空間と荷物の空間を明確に分け、キャビンは快適性を追求し、荷室は使い勝手を重視。
それぞれの目的・性格に合わせ、色や素材・テクスチャーを使い分けています。
ワゴンだからできるデザインです。

高効率パッケージ実現のために、 グローバル・スモールプラットフォームを採用。

極めて高いスペース効率と
レイアウトの自由度を革新的に進化させた、
Hondaのグローバル・スモールプラットフォームを採用。
センタータンクレイアウトを中核に、
コンパクトなH型トーションビームサスペンションなどにより、
広い居住空間と荷室空間、そして低いフロアを実現しました。
ワゴンというスタイルの中で、センタータンクレイアウトが
そのポテンシャルをさらに発揮しました。



※1 G スカイルーフ/L スカイルーフの数値 G/Lは950mm ※2 助手席最後端スライド時の数値 ※3 G スカイルーフ/L スカイルーフのFF車の数値

都市でも扱いやすい、コンパクトなボディサイズ。

パッケージ開発にあたり、人と荷物のスペースを充分確保した上で、
コンパクトなサイズにまとめることも大きな狙いでした。そこで、数値を積み重ねて大きさを決めるのではなく、
サイズ感、広さ、スポーティなフォルムなどをバランスさせる目標ラインを決めて開発に取り組みました。
そして全長は取り回しのよい4,350mm、全幅は5ナンバーサイズいっぱいの1,695mm、
全高は一般的な立体駐車場に収容できる1,515mm^{*}、
ホイールベースは高い走行安定性や伸びやかなデザインを実現するために2,550mmに設定しました。

※G スカイルーフ/L スカイルーフのFF車の数値 G/LのFF車は、1,505mm

特にこだわり抜いたのは、リア空間。

今回、特に注目したのがタンデムディスタンス^{※1}の設定です。
座っている人と人の距離感、
リアシートに置いた荷物との距離感など
さまざまな検討を経て、最終的に985mm^{※2}に決定。
足がゆったりと組めるほどの、
ひとクラス上のゆとりを確保しました。

※1 フロントシートとリアシートのヒップポイント距離
※2 平均的日本人男性の着座位置 (Honda設定) によるHonda測定値

ロングな荷室長。

荷室長は5名乗車時でも余裕の970mm。2名乗車時は
リアクッションをフロントシート側に起こすこともなく、
リアシートバックをワンタッチでダイブダウンさせれば、
フロントシートが最後端位置でも、
1,810mmのロングな荷室になります。

Flexible

積みやすく降ろしやすい、という本来の機能を、
いちだんと高めたラゲッジスペース。

荷室には荷室の世界を。「カジュアルトランク」という考え方。

「あんなことに使えそうだ、こんなものを積みそうだ」と、
見るだけで実感できるようなラゲッジスペースをめざしました。
そのコンセプトは、気楽に何でも積めてすっきりスマートに収まる「カジュアルトランク」。
そのために、居住スペースとは異なる素材やカラーを採用するなど、
人と荷物の空間を明快に分ける手法を取りました。
例えば、荷室サイド面は、樹脂製のタフなつくりとしています。

大容量、大開口。しかも荷室長、荷室高も誇れるラゲッジスペース。

2名乗車時の荷室長は、フロントシートを最後まで下げた状態で1,810mm。
5名乗車時でも、970mmの余裕の長さ。
最大荷室幅は1,305mm、荷室高は900mm^{※1}を確保。
これらにより、大容量の荷室容量473ℓ^{※2}を実現しています。
また、テールゲートの開口幅1,130mm、開口高さ855mmで、
大きな荷物も出し入れしやすい広い開口です。

※1 G スカイルーフ/L スカイルーフの数値 G/Lは950mm
※2 5名乗車時、VDA方式によるHonda測定値

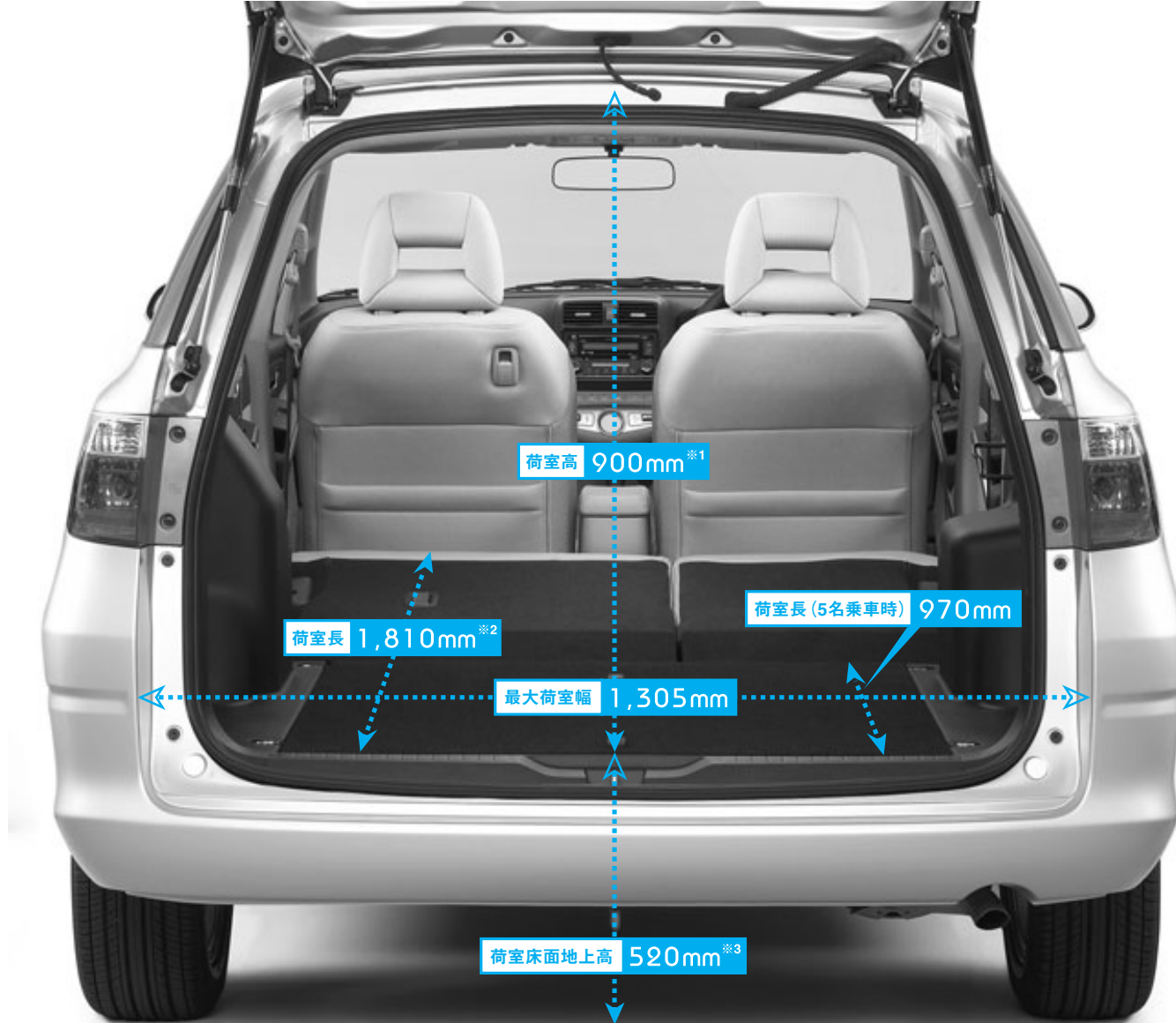
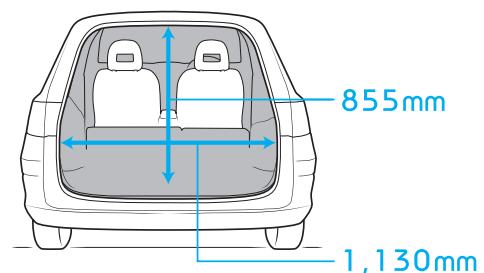


Photo: L スカイルーフ メーカーオプション装着車

※1 G スカイルーフ/L スカイルーフの数値 G/Lは950mm
※2 助手席最後端スライド時の数値
※3 FF車の数値 4WD車は535mm

センタータンクレイアウトだからできた、
ここまでの低床フラットラゲッジスペース。

ラゲッジスペースの床面地上高は520mm^{※1}。
さらにフラットなフロアで重い荷物もラクに積み降ろしができます。
また使いやすさを追求し、4カ所のラゲッジフックや左右のサイドポケット、
ラゲッジスペースアンダートレイ(前/後)^{※2}を装備しています。
前側には三角表示板がすっきり収納でき、
後側では洗車用品などの小物類を収納できるスペースを確保しています。

※1 FF車の数値 4WD車は535mm ※2 G/G スカイルーフは前のみ 写真はリッドを取り外した状態

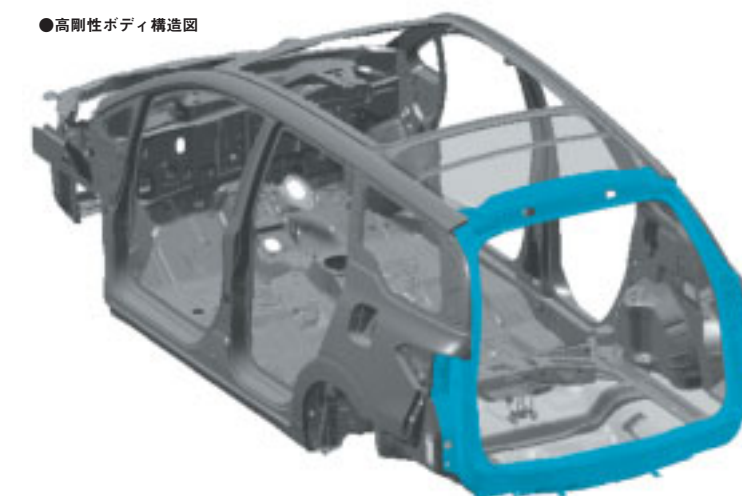


Photo: L スカイルーフ メーカーオプション(アクティブパッケージ)装着車

大開口でありながら、
高剛性を実現したテールゲート。

骨格を太くすれば、剛性は高められます。
しかし、それでは後方視界が犠牲になってしまいます。
そこで、表と裏の部材を重ね合わせた
「もなか状」の閉断面構造を開口部全周に採用し、
さらに内部にスティフナーやバルクヘッドなどの
補助材・補強材を追加。
大きな開口部ながら、高剛性ボディを実現しています。

●高剛性ボディ構造図



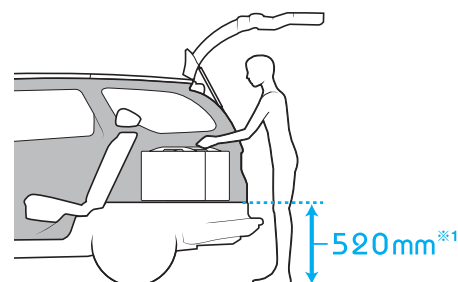
ラゲッジフック



ラゲッジスペースアンダートレイ(前/後)^{※2}



ラゲッジスペースサイドポケット(左/右)



520mm^{※1}

■小物類は撮影のために用意したものです

■イラスト及び写真内の矢印はイメージです ■数値はすべてHonda測定値

Flexible

さまざまなシーンに合わせて、
すみずみまでスマートに使いこなせるユーティリティ。



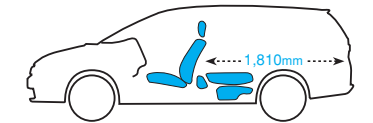
Photo: L スカイルーフ

ULTR Seat

Utility mode

ユーティリティ・モード

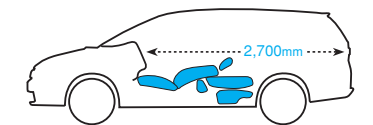
リアシートをダイブダウンすれば、低くてフラットな空間がさらに広がります。フロントシートが最後端の位置でも1,810mmの荷室長に。



Long mode

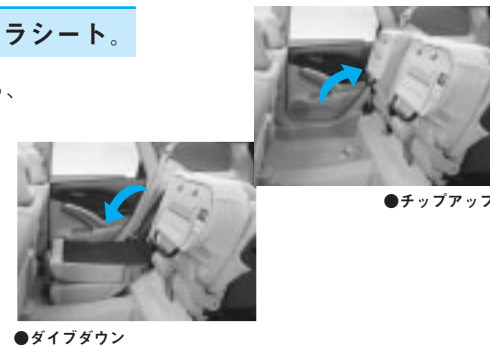
ロング・モード

リアシートをダイブダウンして助手席を後ろに倒せば、長さ2,700mmの空間に。ロングサイズのサーフボードも積載可能。



Hondaならではのユーティリティ技術、より使いやすくなったウルトラシート。

センタータンクレイアウトが生んだ、簡単な操作で多彩なシートアレンジを可能にする、Hondaならではのウルトラシート。ウルトラシートのメリットを最大限活かし、容量だけではなくフレキシブルなスペースづくりを実現しました。大きく確保したタンデムディスタンスが使いやすさに貢献。ダイブダウンは基本的に、フロントシートを最後まで下げた状態でも、リアシートのヘッドレストはそのままに、シートバックを前に倒すだけで、すっばりとシートが収まります。チップアップは、シートの座面をはね上げる簡単操作です。

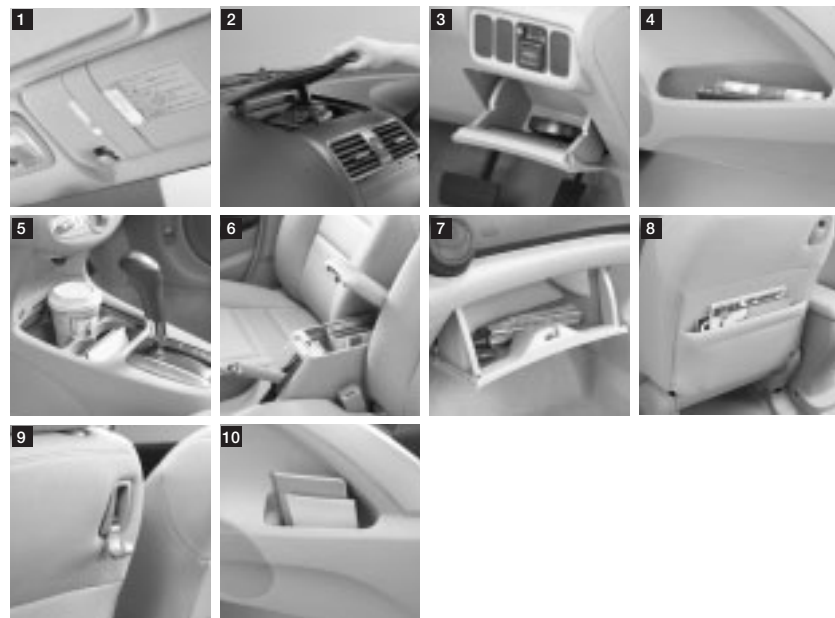


小物の収納もスタイリッシュに、使い勝手と上質感を両立。

ポケット類は、収納品が見えないようにリッド付にするなど、使う人の視点で“よりスマートに使いやすく”を追求しました。

- 1 チケットホルダー付サンバイザー（運転席側）
- 2 インパネセンターアッパーボックス
- 3 コインポケット
- 4 フロントドアポケット
- 5 フロントコンソールボックス（カップホルダー／照明／シャッター付）
- 6 センターコンソールボックス（リッド付）
- 7 グローブボックス
- 8 フロントシートバックポケット（運転席／助手席）*
- 9 コンビニフック（助手席）
- 10 リアドアポケット

* G/G スカイルーフは助手席のみ

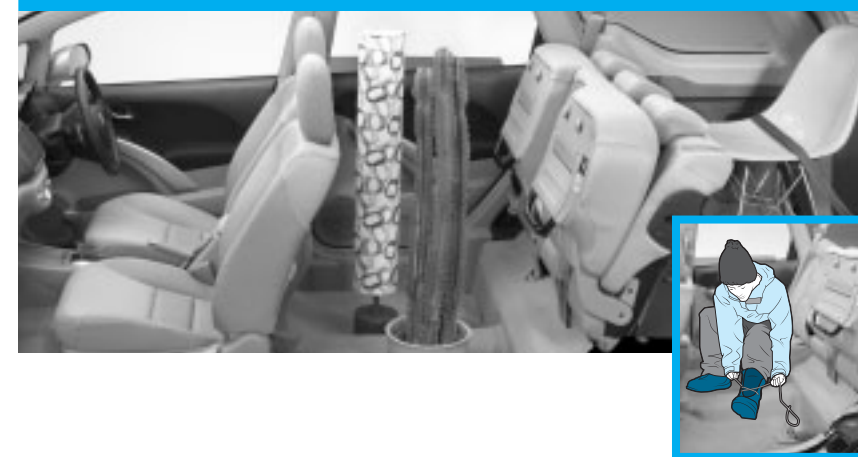
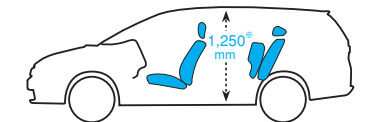


Tall mode

トール・モード

リアシートをチップアップすれば、高さ1,250mm*の空間が出現。フロントシートとの間にゆとりがあるので、レジャーに出かけた際の着替えスペースとしても快適に使えます。

* G/Lの数値 G スカイルーフ/L スカイルーフは1,230mm



Refresh mode

リフレッシュ・モード

フロントシートのヘッドレストを外して後ろに倒せば、足を伸ばしてゆったりくつろげる空間に。スカイルーフ*とともに爽快なひとときを。

* G スカイルーフ/L スカイルーフ

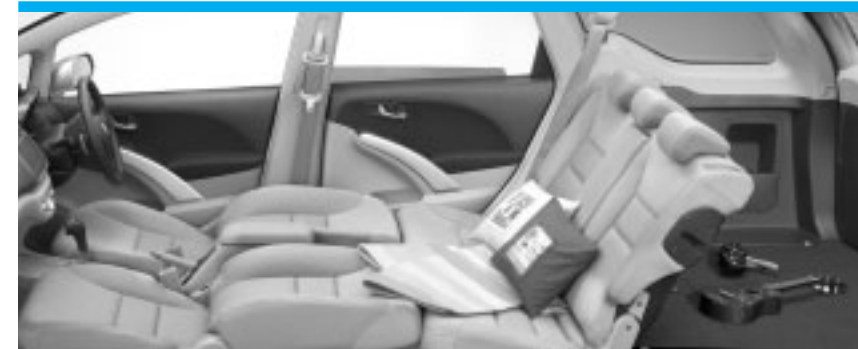
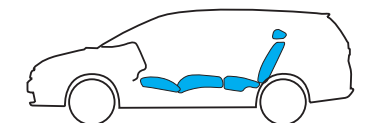


Photo: L スカイルーフ デイラーオプション装着車 カットボディによる撮影
■イラストは機能説明のためのイメージです ■小物類は撮影のために用意したものです ■数値はすべてHonda測定値

Sporty

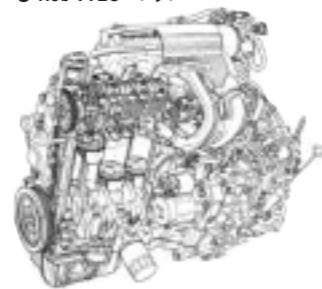
何よりも気持ちのいい軽快な走りのために、
パフォーマンスのベストマッチングをめざしました。

爽快な走りや低燃費、環境性能を高次元バランス、 1.5ℓ VTEC エンジン。

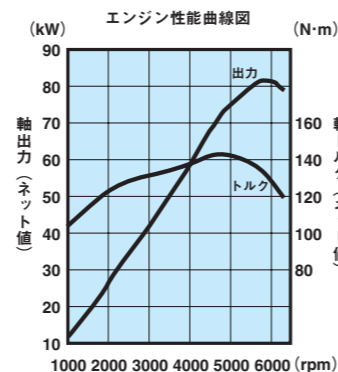
クルマの性格、サイズや重量などを考慮して
排気量は1.5ℓとし、さらに伸びのある爽快な走り求めて
VTEC エンジンを搭載しました。
バルブタイミングが切り換わるVTECエンジンならではの爽快感。
高回転域までスムーズに吹きあがる、
優れた加速性能を發揮します。また同時に、
空力性能の追求や細部のリファインを積み重ね、
クラス※1トップレベルの18.0km/ℓ※2(FF車)という低燃費を実現。
全タイプ「平成22年度燃費基準+5%」を達成しています。
またキャタライザーの早期昇温を図るために、
エキゾーストマニホールドの形状やO₂センサーの取り付け位置に
工夫を凝らし、排出ガス中の有害物質を低減。
全タイプ国土交通省「平成17年排出ガス基準75%低減レベル」
認定を取得し、環境性能も高レベルに磨き上げています。

※1 1.5ℓワゴンクラス
※2 10・15モード走行燃料消費率(国土交通省審査値)

●1.5ℓ VTEC エンジン



VTEC



●最高出力
81kW [110PS] / 5,800rpm*

●最大トルク
143N·m [14.6kg·m] / 4,800rpm*

●燃料消費率※2
18.0km/ℓ (FF車) 17.0km/ℓ (4WD車)

*はネット値

Photo: L スカイルーフ メーカーオプション(アクティブパッケージ)装着車



人間の感覚にさらにマッチした ホンダマルチマチックS+7スピードモード。

タウンからレジャーまで幅広いシーンに応える
エアウェイブにふさわしいトランスミッションとして、
「ホンダマルチマチックS」を採用。
変速特性のセッティングを見直し、
人が心地よく感じる領域まで、進化・熟成を遂げています。
アクセルワークにリニアに応える小気味のいいレスポンスと、
心地よい加速感を実現しました。
さらに、マニュアル感覚で自在にシフトチェンジできる
7スピードモードを採用(L/Lスカイルーフ)。
パドルシフトの操作に合わせて数字を表示する
シフトインジケータが、操る楽しさを広げます。



スポーティなドライビングを楽しむための自発光式独立5眼メーター。

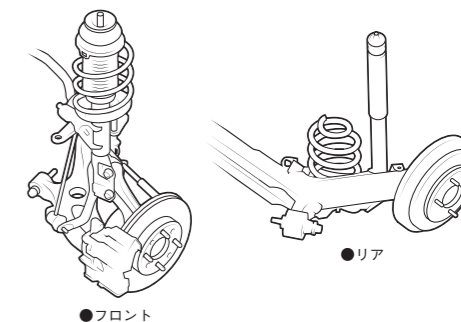
運転を楽しむことも、エアウェイブが提供したい価値です。そのためにあえてアナログメーターに
こだわり、スピードメーター、タコメーター、燃料計、水温計を配置。さらに中央に7スピードモードの
シフトインジケータを装備した自発光式独立5眼メーターをL、Lスカイルーフに採用。
スペースシャトルの噴射口をイメージしたシリンダー状デザインのメーターが、
スポーティな雰囲気を高めています。G、Gスカイルーフには、独立4眼メーターを採用。

●自発光式独立5眼メーター



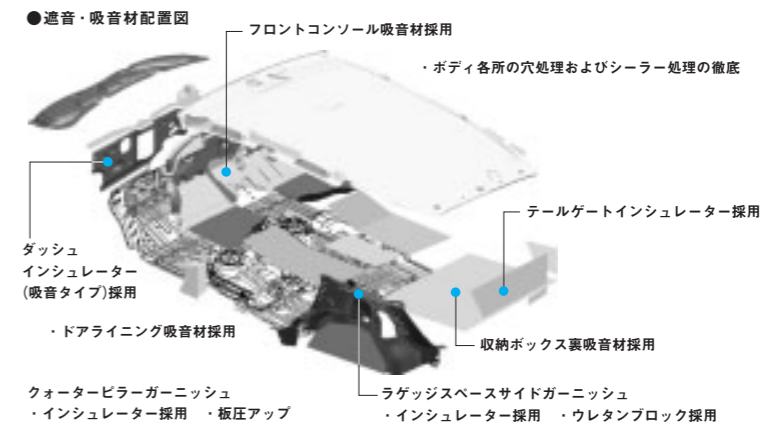
快適性と安心感を追求した、新設計サスペンション。

フロントはストラット式、リアはH型トーションビーム式を採用し、
レジャーなどワゴンならではの使い方を考え、サスペンションを新設計しました。
ロールセンター高、ロールステアなどの最適化を行い、素直な応答性と
コーナリング時の安定性を追求。乗る人すべてに快適で安心感のある、ゆったりとした
乗り心地を実現しました。また、ブレーキシステムには、多くの荷物を積載していても
確実な制動力を發揮できるように、14インチフロントベンチレーテッドディスクや、
7+8インチのタンデムマスターパワーを組み合わせて採用しました。



静粛性と加速時のリニアな音質を両立する、 優れたNV性能。

低床化のため、インシュレーターを配置する
スペースが限られている中、高剛性ボディをベースに
従来の遮音・吸音材に加え、
新たに吸音タイプの防音材を効果的に配置し、
極力ロードノイズを抑えました。
しかも、音圧の変化を抑え爽快なエンジン音も追求。
エンジンの取り付けマウントブラケットの
剛性アップにより、ストレスのない
リニアな加速エンジン音を実現しました。



軽量・コンパクトなリアルタイム4WD。

通常は、ほぼFF状態で走行。状況に応じて後輪にも適切な駆動力を配分。
低燃費にも優れた軽量のデュアルポンプシステムを採用しています。

安全性能

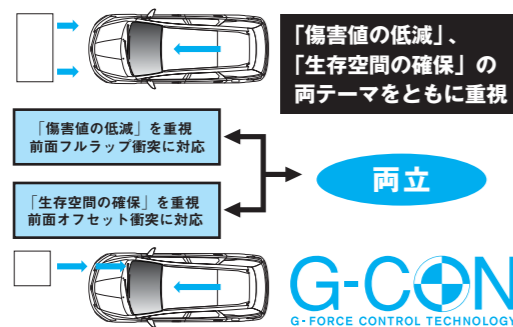
アクティブセーフティからパッシブセーフティまで、大きな視野で安全性を追求。

事故を未然に防ぐためのアクティブセーフティ。

クルマとしての基本性能を徹底的に磨き上げるとともに、視認性や操作性という運転のしやすさを追求。その上で運転にゆとりと安心を与える装備を搭載。EBD(電子制御制動力配分システム)付ABSやペダル踏力を補助するブレーキアシスト、さらに後続車からの視認性を高めるハイマウント・ストップランプ(LED)を全タイプに標準装備しています。

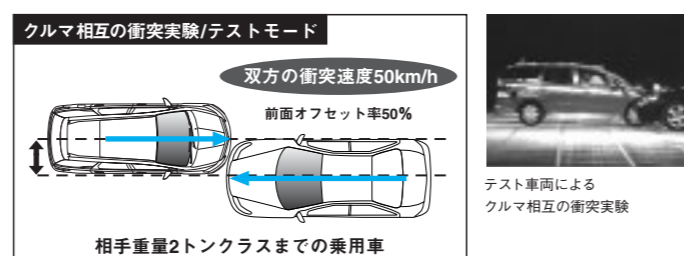
万一の際に人を守るためのパッシブセーフティ。

衝突時の衝撃(G)をコントロールして人への傷害を軽減するHonda独自の「Gコントロール技術」により、前面フルラップ衝突55km/h、前面オフセット衝突64km/h、側面衝突55km/h、後面衝突50km/hに対応する優れた衝突安全性能を実現しています。また、「頸部衝撃緩和フロントシート」、「頭部衝撃保護インテリア」を採用。



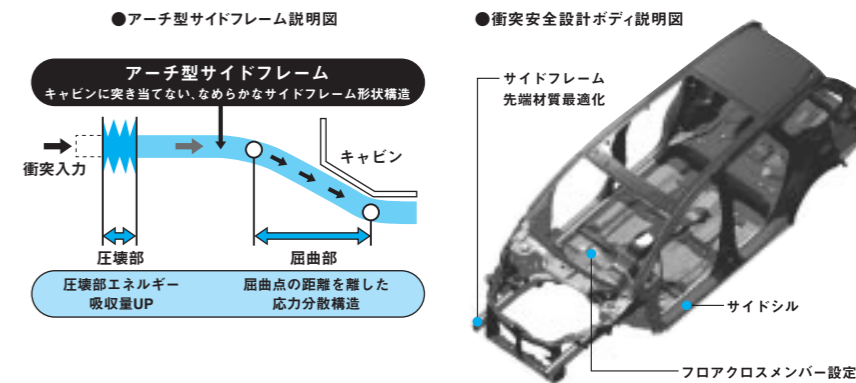
リアルワールドでの衝突安全性能を追求。

実際の事故をより忠実に再現するために、世界初の屋内型全方位衝突実験施設で、クルマ同士はもちろん、歩行者も視野に入れたリアルワールドの安全研究を推進。より正確で広範なデータを蓄積し、クルマづくりに取り入れることが、さまざまな事故から人を守ることに繋がると考えています。Hondaは、規制を基準とするだけでなく独自の安全を追求し続けています。



アーチ型サイドフレームを採用した衝突安全設計ボディ。

前面衝突時の安全性能を高めるために、アーチ型サイドフレームを採用。フレームをなだらかなアーチ状にすることで、衝突時の衝撃を効率よく分散します。さらに、主要フレームの板厚やハイテン材の強度の最適化を図るとともに、ダッシュボードの剛性アップ、フロアクロスメンバーなどを設定しました。



フロント3点式ロードリミッター付プリテンショナーELRシートベルト+前席ラッププリテンショナー。

前方向からの強い衝撃を感じると瞬時にシートベルトを巻き取り、その後一定以上の荷重がかかるとシートベルトを少し送りだし胸などへの負担を軽減します。さらに、ショルダー側のプリテンショナーに加え、腰ベルト外側にもラッププリテンショナーを採用。乗員の拘束効果をいっそう高めることにより、傷害の軽減をめざしました。

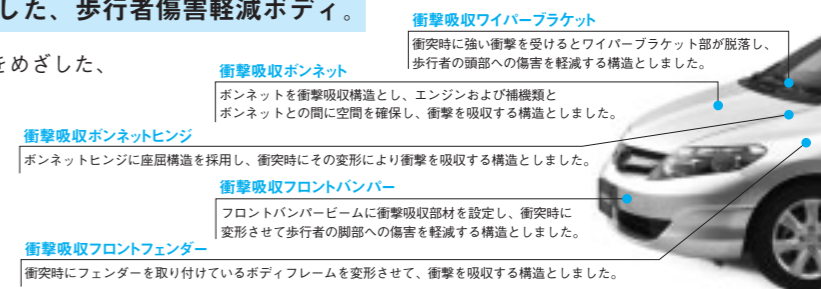


リア3点式ELR/ALR(チャイルドシート固定機構)シートベルト&リアヘッドレスト(3席)。

リアシートには、3席とも3点式シートベルトと、ヘッドレストを採用しました。

頭部や脚部に対する衝撃吸収構造を採用した、歩行者傷害軽減ボディ。

Hondaでは、万一の際の歩行者衝突時の傷害軽減をめざした、歩行者傷害軽減ボディの開発に取り組んでいます。生命に関わるダメージを最も受けやすい頭部はもちろんのこと、さらに脚部にも対応。ボンネット、ボンネットヒンジ、ワイパー取り付け部、フロントフェンダー、バンパーに衝撃吸収構造を採用しています。



その他、充実した安全装備。

- は標準装備 ○はメーカーオプション
- 運転席用&助手席用SRSエアバッグシステム ● ISO FIX対応チャイルドシート固定専用バー(リア左右席)+テザーアンカー(リア左右席)
- 前席用i-サイドエアバッグシステム(助手席乗員姿勢検知機能付) ○ ディスチャージヘッドライト<HID>(ロービーム、オートレベリング機構付)

環境性能

高水準のクリーン性能、低燃費を追求。

全タイプ国土交通省「平成17年排出ガス基準75%低減レベル」認定を取得。

キャタライザーの早期昇温などにより、排出ガス中の有害物質、NMHC(非メタン炭化水素)、NOx(窒素酸化物)、CO(一酸化炭素)をそれぞれ低減。平成17年排出ガス規制に適合しただけでなくNMHCとNOxを基準値の1/4以下にまで低減し、「平成17年排出ガス基準75%低減レベル」認定を取得しています。



「平成17年排出ガス基準75%低減レベル」認定車表示マーク
平成17年排出ガス規制のNMHC、NOxについて基準値を75%以上下回る優秀な環境性能を達成した車両に与えられます。

全タイプ「平成22年度燃費基準+5%」を達成。

カムジャーナル面の面粗度向上によるフリクション低減などにより、平成22年度燃費基準に適合しただけでなく、さらに5%以上上回る、優れた低燃費を実現しています。



「平成22年度燃費基準+5%達成車」表示マーク
平成22年度燃費基準を5%以上上回る優れた燃費性能を達成した車両に与えられます。

リサイクル可能率90%以上^{*}を達成。

内装部品からPVC(ポリ塩化ビニール)を大幅に削減し、リサイクルしやすい材料に変更。使用部材の90%以上^{*}をリサイクル可能にしました。

^{*}Honda独自基準による

鉛使用量を大幅に低減。

鉛レス化を推進し、1996年比で1/10以下^{*}までに使用量を低減。六価クロムの使用量も可能な限り削減しました。

^{*}経済産業省「リサイクルニシアチブ」が設定した2006年以降の新型車基準値

